

特集によせて

村井 勝

(慶應義塾大学医学部泌尿器科)

「泌尿器科学」は「外科学」の一部であり、その subspecialty であることは論を俟たない。したがって、治療面で手術が重視される外科系の専門分野としての近代泌尿器科学の歴史は比較的浅いといえるが、その短い歴史のなかで着実に進歩・発展を遂げている。特に過去 10 年余りの泌尿器科学の進歩は目覚ましいものがあり、医学全体が目指している minimally invasive treatment の流れに沿って大きく変化している。

他の手術を専門とする領域と同様に、この分野では新しい手術機器がたくさん出てきている。すなわち、電気メス、はさみなどの手術機器から、マイクロ波や超音波、さらにはレーザーエネルギーを用いた凝固切開装置、また吻合ないし縫合を目的とする器械など様々なものが出現している。これら多くの器械には、当然のことながら素晴らしい長所のほかに欠点がある。その機器を熟知し、その短所や欠点を十分に理解したうえで、注意しながらその長所を 100% 引き出すことによって、新しい機器の特色を生かすことができるようになる。それにより手術時間の短縮や出血量の減少、合併症の減少がはかられ、結果として患者にやさしい minimally invasive surgery が達成できる。

消化器外科、胸部外科、血管外科など細分化された外科や産婦人科などでは、それぞれに特有の手術器具や手術方法、コツがある。これら他科の先生方の手術を見学すると、泌尿器科領域の手術

あるいは自分の手術方法に大いに参考になることが多々ある。

そこで本誌では、新しい手術器械の特色を十分に理解できるように特集を組んだ。モノポーラ式電気メス、バイポーラ式電気メスに関しては、その原理と構成について詳細に記載していただいた。また通常の開放手術のほかに腹腔鏡をはじめとする内視鏡下手術に用いる応用器具についても述べられている。さらにバイポーラ式電気メスの応用としてバイポーラシザーズの原理についても、その経験を述べていただいた。マイクロ波については腎を中心とした応用が記載してある。超音波凝固切開装置に関しては骨盤内手術や腹腔鏡下手術での応用をその原理とともに細かく記述していただいた。レーザーに関しては、アルゴンビームコアギュレーターを中心にして腎をはじめとする適応・応用について述べていただいた。さらに新しい手術器械として日進月歩の進歩を遂げている自動吻合器・自動縫合器についても具体的な応用方法をその臨床成績とともに記載していただいた。

未経験の器械を用いたり、新しい手術操作を行う際には少々勇気がいる。本特集を熟読され、これらの器械・方法について他の科を含めた経験のある先生方のご意見をうかがったり、またこれらの器械を用いた手術を見学されたうえで、新しい手術方法に取り組まれることを期待する。